

新刊紹介

Jill Rappoport 著

Giving Women: Alliance and Exchange in Victorian Culture

(Oxford U. P. 2012年刊行)

溝 口 薫

英文学史の教科書として有名なノートンアンソロジーには、ヴィクトリア朝の女性観とその変化を示す諸資料を入れた「女性の諸問題」というセクションがある。そこには「家庭の天使」を賛美したバトモアの詩や、家庭で発揮される無私なる女性の美德を説いたエリス夫人の女性教育論の抜粋が入っているほか、1840年代の意欲や自我に乏しい大人しい女性たちと1890年代の目覚めた自我と社会的活動意欲を持つ新しい女性たちを対照し、時代を通して女性が大きな意識の変化を遂げたと称揚するウォルター・ベザントの評論が含まれており、目を引く。その変化過程の解明は、最近、女性教育、奴隷解放にかかわる女性社会運動参加、スラム等での慈善活動、また女性の消費行動など様々な多角的な観点からの史料的研究成果が続々と上がってきており、次第に明らかになってきている状況であるが、本書もそれに連なる研究である。ただ本書がユニークなのは、第一次世界大戦直後に成功した選挙権獲得に至るヴィクトリア朝期女性の社会的権力への目覚めの発端を、19世紀初期における女性の贈与行為の再解釈に見出し、種々の資料のほか文学作品をもちいながら検証している点である。特にドメスティック・イデオロギーの中核をなす概念である女性の自己犠牲的他者愛に社会的な権力へ目覚める発端があるとみる見方は意義深い。著者はモースの贈与論における受け手と送り手という双方向的な捉え方や贈与の非体制的経済性という考え方を踏襲しつつも、そこには女性の視点が不

足しているとし、女性の他者愛の自己主張性に注目する。体制経済からは切り離されていても、女性の身の回りのこまごまとした物や動産の贈与という行為、あるいはその肉体の自己犠牲的な贈与行為においては、ある見返りが獲得されているのであり、そのような行為習慣は、女性に計算する経済主体としての意識をもたらしたばかりでなく、女性の社会関係の広がりや社会権力への意識へと発展してゆく重要な機会となってきたというのである。

序章において、著者はディケンズの『荒涼館』の無私なるエスターがアランとの結婚の際に、彼と後見人のジャンデイスの男性同士の絆ないし両家族間の絆を形成するための贈答品として扱われている点を当時の贈与をめぐる考え方の典型として指摘したあと、彼女の周囲への無欲な奉仕が、実は彼女と他の女性を結びつける社会関係を強める結果となっている点に注目し、この女性同士の絆の形成を交換として得る女性の贈与の特殊なあり方が、実は、時代の初期の女性読者をターゲットとして大変流行した文芸誌や、時代のキャンノンといわれるシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』、エリザベス・ブラウニングの『オーロラ・リー』、あるいはギヤスケル夫人の『クランフォード』、またクリスティーナ・ロセッティの『ゴブリン・マーケット』などに顕著な形で現れていることを続く章で次々と明らかにしていく。その明確でわかりやすい英文も手伝って、体制的経済社会からは締め出され贈答品として扱われるばかりに見えた自己犠牲的な女性が、その限られた条件のなかで、贈与や義務的返報行為を自らのコントロールの範囲内で主体的に行い、その結果として社会関係やコミュニティを保持したり形成したりしながら、その開発能力を形成してゆくことが明らかになるのである。著者はまたその過程の複雑な展開にも留意し、たとえば、女性が富の蓄積競争よりは分配を求め体制的経済社会とは対照的な活動を果たしている傾向があること、また贈与者と享受者の不均衡な関係が、女性同士の絆の形成においてどのような意味をもたらすのかについての考察も展開している。

前半のキャンノンのおけるこうした斬新な解釈は本書の大きな魅力の一つでは

あるが、本書の後半では、消費社会に突入した1860年代以降の女性をめぐる文脈を背景に、贈与が与す女性の繋がりが、集団としてそれ自身の犠牲的な行為を通して社会的な権力を獲得していく過程が明らかにされる。著者はまず女性の慈善活動の代表的な存在でもある救世軍活動とその言説を、その初期形態であった宗教団体の慈善活動から連続的に捉え、そこにシスターたちの連帯を通して社会に無私に奉仕する集団のその贈与行為を中心に、階級を超える女性同士の絆の拡大とその限界、ならびに消費を通して贈与の文脈に体制的経済社会が関わっていく変化について検証している。

著者の社会全体に目配りは幅広く、次章では、消費社会における女性たちがいかに優生学を利用しながら自らの政治的活動を正当化していくかが論じられる。消費社会において消費主体となった自らの寄生的存在への批判を払拭するかのよう、優生学に強い関心を払った女性たちは、母性を民族のための自己犠牲的再生産存在として位置づけることで、社会に対していわば交換的に女性の社会における政治的活動を正当化するという。本書の最後は1890年代以降の女権運動における女性贈与のイデオロギーのありようを検証するものであるが、そこでも贈与イデオロギーは女性の社会化と戦闘的ともいえる社会権力の行使と切り離せない。消費社会のなかで女性たちは、バザーなどの贈与を中心とする非体制的経済活動によって、彼女らの主張を共にする者の絆を広げてゆく。そして最終的には戦争の支持による活動の中断と引き換えに、女性参政権を実現させるのである。

本著のダイナミズムは、ヴィクトリア朝における社会権力獲得に積極的になっていく女性の大きな意識変化は、作品や作家の書き物に残る女性の、結婚生活や市場の外での、プライベートな贈与行為を通してネットワークを形成するその日常的な行為から発生していると見るところにある。また女性が公的社会的活動で活躍するその活動のあり方を再定義していくその過程を、膨大な史料やイメージ、作品を駆使しつつ、詳細かつ明快に検討していることもその大きな魅力である。